

〈新刊紹介〉

郭木蘭著『今昔物語集』の漢語研究』

本書は、『今昔物語集』における漢語の実態を明らかにした書であり、『今昔物語集』の漢語の分布、漢語の形成、漢語の浸透と層別、漢語の伝承という4つの視点からの考察がなされている。

「序文（坂詰力治織）」「凡例」「序章 和漢混淆文の漢語」に続く、4章構成。「第1章『今昔物語集』の漢語の分布——文体との関わり——」では、漢語の分布実態が明らかにされ、『今昔物語集』の文体との関係が検討されている。「第2章『今昔物語集』の漢語の形成」では漢語を漢籍語、仏典語、日常実用語の三つに大別し、『今昔物語集』の漢語の使用実態を調査している。「第3章 日常生活との関連——漢語の浸透と層別——」では『今昔物語集』の衣食住など生活に直結する語彙を対象に漢語を調査検討し、そうした漢語の日本語語彙への平安時代における浸透の程度を論じている。「第4章 現代語との関連——漢語の伝承——」では漢語の伝承という観点から『今昔物語集』に見られる漢語と現代日本語との関連についての考察がなされている。末尾に「結章」「参考文献」「構成論文初出一覧」「あとがき」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年8月31日発行 笠間書院刊 A5判縦組み 336頁 8,500円＋税 ISBN 978-4-305-70869-4）

ユーリー・S・マスロフ著、林田理恵・金子百合子訳『アスペクト論』

本書は、言語学翻訳叢書の第16巻としてひつじ書房より刊行された、ユーリー・セルゲーヴィチ・マスロフが1984年に発表した《Очерки по аспектологии》の邦訳である。

「はじめに」に続いて、「第1章 アスペクト論の基本概念」「第2章 スラヴ諸語における完了体／不完了体カテゴリー」「第3章 スラヴ諸語におけるインパーフェクトとアオリスト」「第4章 非スラヴ諸語のアスペクト論と対照言語学的アスペクト論の諸問題」の4章構成。末尾に「マスロフ著『アスペクト論』によせて（林田理恵）」「参考文献」「日本語文献」「事項索引」「言語索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年9月13日発行 ひつじ書房刊 A5判縦組み 432頁 10,000円＋税 ISBN 978-4-89476-721-8）

駒走昭二著『ゴンザ資料の日本語学的研究』

本書は、ゴンザが残した6点の書物（『露日単語集』『日本語会話入門』『簡略日本文法』『新スラヴ日本語辞典』『友好会話手本集』『世界図絵』）をゴンザ資料と称し、それを日本語学的に考察したものである。18世紀前期薩隅方言を明らかにし日本語史の中に位置づけることを目指したゴンザ資料の研究書である。

「まえがき」に続く4部構成。第I部ではゴンザ資料の基本的な性質の考察が行われ

ており（「第Ⅰ部 ゴンザ資料について」）、第Ⅱ部では音韻、第Ⅲ部では文法、第Ⅳ部では語彙の問題が扱われている（「第Ⅱ部 音韻」「第Ⅲ部 文法」「第Ⅳ部 語彙」）。

第Ⅰ部は「第1章 ゴンザ資料の筆録者」「第2章 ゴンザの出身地」「第3章 ゴンザ資料による方言史研究」の3章構成。第Ⅱ部は「第1章 エ列音の表記と音韻」「第2章 イ列音の表記と音韻」「第3章 アクセント符号について」「第4章 特殊拍とりズム——薩隅方言の特異性——」の4章構成。第Ⅲ部は「第1章「ゆる・らゆる」と「る・らる」について」「第2章 敬意表現」「第3章 カス型動詞について」の3章構成。第Ⅳ部は「第1章 『新スラヴ日本語辞典』の日本語訳」「第2章 『新スラヴ日本語辞典』の語彙」「第3章 『新スラヴ日本語辞典』における漢語語彙」「第4章 『新スラヴ日本語辞典』における「自由」の語義」「第5章 『新スラヴ日本語辞典』における現代標準語」「第6章 18世紀の薩隅地方へ伝播した中央語」「第7章 現代語の形成と中央語の伝播」の7章構成。末尾に「あとがき」と「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年10月1日発行 和泉書院刊 A5判横組み 314頁 10,000円＋税 ISBN 978-4-7576-0886-3）

森篤嗣編、森篤嗣・田中祐輔・中俣尚己・奥野由紀子・建石始・岩田一成著『コーパスで学ぶ日本語学 日本語教育への応用』

本書は、「コーパスで何ができるかを学ぶ」というコンセプトの下、日本語教育に関わる人々に、実際にコーパスに触れることでその有用性を実感してもらうことを目的としたものである。具体的なテーマが扱われた章は導入、例題、解説、演習で構成されており、実習形式による段階的な学習が可能となっている。

本書の構成は次の通りである。「まえがき」に続き、「第1章 総説（森篤嗣）」「第2章 日本語教材の分析（田中祐輔）」「第3章 文型とコロケーション（森篤嗣）」「第4章 学習者話し言葉コーパス分析（中俣尚己）」「第5章 学習者書き言葉コーパス分析（奥野由紀子）」「第6章 対照言語学的分析（建石始）」「付録 コーパス利用の基礎（岩田一成）」。末尾に「索引」「著者紹介」を付す。（田中佑）

（2018年10月1日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 164頁 2,400円＋税 ISBN 978-4-254-51655-5）

今野真二・小野春菜著『言海の研究』

本書は、『言海』を一つの指標として明治期の日本語をより精密に観察することを見据えながら、辞書体資料（何らかの「編集」が施されている文献）としての『言海』の「全貌」を可能な限り明らかにすることを目的としている。

「言海の研究：はじめに（今野真二）」「序章 『言海』研究史（小野春菜）」と、「第一章 『言海』にながれこむもの（小野春菜）」（「第一節 江戸期の辞書との関係」「第二節 辞書の形態の模索」）「第二章 『言海』はどのように成ったか（小野春菜）」（「第一節 内容見本からわかること」「第二節 稿本『言海』からわかること」「第三節 校正刷からわかる

こと)「第三章『言海』はどのような辞書か」(「第一節『本書編纂ノ大意』」「凡例」から探る(今野真二・小野春菜))「第二節『言海』の体例(組織)について(今野真二・小野春菜)」「第三節『普通語』について(今野真二)」「第四章 明治の辞書と『言海』」(「第一節 高橋五郎『いろは辞典』との対照(今野真二)」「第二節 山田美妙『日本大辞書』との対照(小野春菜)」「第五章 明治の日本語と『言海』」(「第一節 明治期出版物と『言海』(小野春菜)」「第二節 語彙的観点からみた『言海』(今野真二・小野春菜)」「第三節 表記的観点からみた『言海』(今野真二)」「第四節『言海』と非辞書体資料(今野真二)」「第六章『言海』以降の辞書(小野春菜)」(「第一節『大日本国語辞典』と『言海』」「第二節『言海』から『大言海』へ」「第三節『言海』と『大言海』」)「終章 近代辞書としての『言海』(今野真二)」から成る。また、巻頭に「凡例」、巻末に「参考文献」を付す。(田中佑)

(2018年10月10日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 448頁 10,000円+税 ISBN 978-4-8386-0713-6)

飛田良文・佐藤武義編集代表、小林隆編、志村文隆・新井小枝子・小川俊輔・小林隆・榎引祐希子・椎名涉子・八木澤亮・作田将三郎・大西拓一郎・半沢康・佐藤高司・大野眞男・竹田晃子・小島聡子・坂喜美佳著『シリーズ〈日本語の語彙〉8 方言の語彙——日本語を彩る地域語の世界——』

本書は、現在の研究の最前線を踏まえ、新しい視点・成果を提示するために企画・編集された『シリーズ〈日本語の語彙〉』の一冊として刊行されたものであり、語彙の地理的側面としての方言に関する研究の豊富な目的・視点・方法を紹介することを目的としたものである。

本書の構成は次の通りである。「序 方言の語彙への誘い(小林隆)」に続き、「第1部 地域世界を映す言葉」に「第一章 風と天候の方言語彙(志村文隆)」「第二章 生活・生業と方言語彙(新井小枝子)」「第三章 キリシタン文化と方言語彙(小川俊輔)」、「第2部 創造性が育てる言葉」に「第四章 方言語彙の発想法(小林隆)」「第五章 接尾辞「コ」の創造力(榎引祐希子)」「第六章 育児語と方言語彙(椎名涉子)」、「第3部 変化の中にある言葉」に「第七章 方言語彙の語源と歴史(八木澤亮)」「第八章 地方語文献にみる方言語彙(作田将三郎)」「第九章 方言語彙の分布の変動(大西拓一郎)」「第十章 現代における方言語彙の動態(半沢康)」、「第4部 社会と交わる言葉」に「第十一章 若者世代の方言語彙(佐藤高司)」「第十二章 方言語彙の継承と教育(大野眞男・小島聡子・竹田晃子)」「第十三章 社会支援と方言語彙(小林隆・坂喜美佳)」。「末尾に「執筆者紹介」「索引」を付す。(田中佑)

(2018年10月10日発行 朝倉書店刊 A5判縦組み 216頁 3,700円+税 ISBN 978-4-254-51668-5)

日本語学会編『日本語学大辞典』

国語学会・日本語学会創立70周年記念事業として企画・刊行された辞典。学会創立

10周年を記念して1955年に刊行された『国語学辞典』、学会創立30周年を記念して1980年に刊行された『国語学大辞典』に続く、国語学会・日本語学会が編集・刊行する3冊目。『国語学大辞典』の中項目主義を踏襲しつつ、その内容に再検討が加えられ、797項目が収載されている。

本書の構成は、「刊行のことば」「刊行の経緯」「1980年版『国語学大辞典』刊行のことば」「1955年版『国語学辞典』刊行のことば」「凡例」「執筆者一覧」「総目次」「分類項目一覧」「日本語学大辞典 本文」「付録」「日本語年表」「日英用語対照表」「索引」「編集を終えて」「三世の縁」。(阿久澤弘陽)

(2018年10月10日発行 東京堂出版刊 B5判横組み 1328頁 37,500円+税 ISBN 978-4-490-10900-9)

安田敏朗著『大槻文彦『言海』——辞書と日本の近代——』

「人間にとって本とはいったい何なのか、本は今後どうなっていくのか」という問いに、名著を紐解くことによってアプローチしようとするシリーズ「世界を読み解く一冊の本」の一つとして刊行された本書は、国家の意志によって企画・編纂された辞書『言海』について、そのような辞書が必要とされた背景や、それが社会に与えた影響、著者である大槻文彦も知らないところで展開される言説が流通する「世界」を、『言海』全体の構成や、大槻文彦の生涯、辞書と規範と国家とナショナリズムという観点から読み解くことを目標とする。

構成は「序 なんのための辞書」「Ⅰ 大槻文彦とその時代」「Ⅱ 『言海』のめざしたもの」「Ⅲ 『言海』からみる世界」。巻頭に「凡例」、巻末に「参考文献」を付す。(田中佑)

(2018年10月12日発行 慶応義塾大学出版会刊 四六判縦組み 208頁 2,000円+税 ISBN 978-4-7664-2554-3)

青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究 4』

本書は、日本語文法史研究の最新の成果を国内外に継続的に発信することを目指すシリーズ「日本語文法史研究」の第4号である。シリーズ初の試みとして前号でテーマ解説を行った「コーパス」に関する小特集が組まれている。

本書の構成は次の通りである。「はしがき」に続き、「指示詞+助詞」による文接続の一考察——現代語・中古語コーパスの対照から——(岡崎友子)、「中古語複合形容詞 [名詞+次元形容詞] の構文バリエーション(池上尚)」「助詞の介在——補助動詞「す」を中心に——(吉田永弘)」「中世後期日本語動詞形態小見(大木一夫)」の4編から成る《小特集 コーパス》と、「一音節名詞被覆形(蜂矢真弓)」「中古和文の「ぞ+かし」——「ぞ」と「かし」との対照から——(富岡宏太)」「事態継続と期間継続——中世抄物を中心に——(福沢将樹)」「「ござる」の丁寧語化をめぐる(青木博史)」「分類の深層——『あゆひ抄』の隊から——(小柳智一)」

「鹿児島方言におけるテンス・アスペクト・ムードの歴史（久保蘭愛）」、さらに、「【テーマ解説】近世語（岡部嘉幸）」「【テーマ解説】歴史語用論（森勇太）」「【文法史の名著】此島正年著『国語助詞の研究——助詞史素描——』（宮地朝子）」「日本語文法史研究文献目録2016–2017」を収める。末尾に「索引」「執筆者紹介」を付す。（田中佑）

（2018年10月22日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 308頁 4,000円+税 ISBN 978-4-89476-899-4）

名嶋義直著『批判的談話研究をはじめ』

本書は、批判的談話研究（Critical Discourse Studies; CDS）が日本で成立しうるか、それが日本で位置づけられ実践可能なものにするにはどうするべきか、という課題に対する実践であり、CDSに関する9つの論文が収録されている。

「序章 日本において批判的談話研究はいかに成立しうるか」に続き、憲法改正をめぐる新聞記事の分析である「1章 憲法改正をめぐる安倍首相ビデオメッセージのマクロ分析」「2章 憲法改正をめぐる安倍首相ビデオメッセージのミクロ分析」、沖縄の辺野古新基地建設と2016年に行われた宜野湾市長選挙をめぐる新聞記事の分析である「3章 辺野古新基地建設をめぐる社説の批判的談話研究——日本語教育への展開を視野に——」「4章 宜野湾市長選をめぐる新聞記事の批判的談話研究」、いわゆる「萌えキャラ」の支配性についての考察である「5章 萌えキャラのポリティクス1——その支配性——」「6章 萌えキャラのポリティクス2——その多様性と拡張性——」「7章 萌えキャラのポリティクス3——そのジェンダー性——」、原発再稼働推進を歓迎し日本社会がさらに原発を活用しよう主張する社説を分析した「8章 社説に見る「反・脱原発」のイデオロギーとヘゲモニー」、および原発事故をめぐる新聞記事を分析した「9章 考えることを無効化する言説と対抗ヘゲモニー」の9章構成。末尾に「あとがき」と「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年11月15日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 304頁 3,200円+税 ISBN 978-4-89476-927-4）

沖森卓也編『歴史言語学の射程』

編者である沖森卓也氏の立教大学定年退職に際し、氏の功績を記念して編まれた歴史言語学をテーマとした論集。

本書は、「序（沖森卓也）」に続き、「いわゆる「母音交代」をめぐる（沖森卓也）」「日本語の親族呼称・親族名称とその歴史——言語史の空隙を考える——（林史典）」「「岩ばしる垂水」考——『万葉集』巻八・一四一八番歌の理解のために——（川嶋秀之）」「「ある」ことの希望——万葉集の「もが（も）」と「てしか（も）」——（仁科明）」「韓日現代漢文読法からみた釈読（訓読）の流れ（尹幸舜）」「上代語における文節境界の濁音化（肥爪周二）」「上代における国字の出現と表記の変化（笹原宏之）」「漢文の蔭の日本語表記——続日本紀宣命の逆順〈語〉表記——（屋名池誠）」「東寺観智院金剛蔵『願文集』所収願文の文体について（山本真吾）」「いろ

は歌の作者について——いろは48字説の検討——（鈴木豊）「他言語から見た上代・中古語の推量表現（井島正博）」「係結びの体系（半藤英明）」「『往生要集』成立・享受における言語生活について（一）——『往生要集』執筆と二十五三昧会から見た源信の言語生活——（古田恵美子）」「平安時代の「もろもろ」と「よろづ」——コーパスによる語誌研究——（田中牧郎）」「鎌倉時代の女性文書とその言語記述（金子彰）」「根津美術館蔵春日若宮『大般若波羅蜜多経』の字音点について（佐々木勇）」「室町時代口語資料の漢語と和語の混種語——三大口語資料を中心に——（坂詰力治）」「『語音翻訳』のハングル音訳と琉球語の母音——中期朝鮮の漢字音表記との比較を中心に——（趙大夏）」「古辞書の誤字をめぐって——倭玉篇諸本調査より——（鈴木功眞）」「近世旅日記にみる女性の漢字使用——中村いと『伊勢詣の日記』を資料として——（永井悦子）」「日本人の手による漢訳洋書——村上英俊訳『西洋史記』について——（陳力衛）」「明治初期における聖書の翻訳と日本語意識——漢文訓読語法「欲ス」を例に——（斎藤文俊）」「明治時代における「文意識」と近代文体——二葉亭四迷『浮雲』を例に——（服部隆）」「『西遊見聞』に入った日本語再考（李漢燮）」「『三味線』は「guitar」か？——『和英語林集成』における対訳語について——（曹喜澈）」「ジョン・チャーマーズと『英粵字典』——初版、再版、第3版の考察を中心として——（孫建軍）」「『和英大辞典』（1896）の略号表示——[Chin.]の略号を持つ語と先行辞書との関わり——（木村一）」「『言海』『大言海』の外来語（倉島節尚）」「近代用語としての「生活」とその周辺（木村義之）」「不審顔」という語から（常盤智子）」「明治後期・大正期の口語文典における音韻（阿久津智）」「上田万年「P音考」前後（安田尚道）」「文語教育における「文体」のあり方——中国人日本語学習者の長所やニーズを考えて——（潘鈞）」「三型アクセントと式保存（上野善道）」「間接疑問文による連体修飾について（大島資生）」「語の意味記述はなにをしていることになるのか（山田進）」の36本の論文が収録されている。末尾に「編集後記」と「執筆者一覧」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年11月25日発行 三省堂刊 A5判縦・横組み 624頁 10,000円＋税 ISBN 978-4-385-36243-4）

肥爪周二著『日本語音節構造史の研究』

本書は、拗音・二重母音・長母音・音便・撥音・促音・清濁・連濁などの対立に関する実証的な通史的研究がまとめられたものである。

本書の構成は以下の通りである。序論は「第一章 本書の構成」「第二章 本書の理論的立場」「第三章 上代語・先上代語・日琉祖語の音節構造」、本論「第一部 拗音論」には「第一章 ア段拗音—拗音仮名「茶（茶）」をめぐって」「第二章 ウ段開拗音の沿革」「第三章 唇音と拗音」「第四章 拗音・韻尾の共起制限」「第五章 合拗音の受容」「付章 サ行子音の音価とサ行開拗音」、第二部「二重母音・長母音論」には「第一章 /CVV/音節（二重母音）の歴史」「第二章 長母音成立の音韻論的解釈」「第三章 江戸語の連母音音訛」、第三部「撥音・促音論」には「第一章 二種の撥音便」「第二章 m音便とウ音便」「第三章 リ延長強勢オノマトペ——「ひいやり」「ふうわり」から「ひんやり」「ふ

んわり」へ——」「第四章 撥音と鼻音韻尾」「第五章 ng 韻尾・清濁の表記の相関」「第六章 ng 韻尾の鼻音性——〇エイの形を取る場合——」「第七章 Φ 音便について」,「第四部 清濁論」には「第一章 清濁についての研究史——共通理解とすべき事柄——」「第二章 ガ行 鼻濁音の歴史」「第三章 連濁の起源」「第四章 上代語における文節境界の濁音化」「第五章 龍麿の仮説」「第六章 m 音便の後の清濁」をそれぞれ所収する。巻末に「既発表論文との関係」「参考文献」「引用文献資料」「後記」「索引」「著者略歴」を付す。(前田直子)

(2019年1月18日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 687頁 17,000円+税 ISBN 978-4-762-93639-5)

栗田岳著『古代日本語と現実の諸様態』

本書は、「事実・非事実・反事実」という、文に言語化された事態と現実世界の三つのあり方のうち、複数に跨って事態を構成する古代日本語の言語形式について考察を行い、文事態と現実世界がどのような関係にあるのかを考えようとするものである。

「序説 モコソ・モゾと基本形終止」と、「第一部」の「第一章 ムと「連体形(+ヨ)の終止」」「第二章 「才さかし出ではべらむよ」」「第三章 三代集の「つつ留」について」「第四章 連体修飾のム」,「第二部」の「第一章 マシの反事実と非事実」「第二章 マシと構文的環境」「第三章 上代のセ・シ・シカ」「第四章 上代特殊語法攷」「第五章 助詞ハの諸相」,そして「終章 続紀宣命のケリと来」から成る。また、末尾に「後記」を付す。(田中佑)

(2019年1月20日発行 清文堂刊 A5判縦組み 285頁 8,000円+税 ISBN 978-4-7924-1097-1)

衣畑智秀編『基礎日本語学』

本書は、日本語学全般を見渡すことを目指した、日本語学諸分野の入門解説書である。基礎的な事項の解説が主であるが、個々の章にはそれぞれの執筆者の個性も見られ、高度な内容も学べるようになっている。

「まえがき」に続き、「1 現代日本語の音声と音韻(五十嵐陽介)」「2 音韻の歴史変化(平子達也)」「3 現代日本語の文法(衣畑智秀)」「4 文法の歴史変化(衣畑智秀)」「5 現代日本語の語彙(金愛蘭)」「6 語と語彙の歴史的变化(橋本行洋)」「7 文章論と談話分析(澤田浩子・衣畑智秀)」「8 文体差と文体史(田中牧郎)」「9 言葉の変異と諸方言(平塚雄亮)」「10 コーパスと統計(佐野真一郎)」「11 理論的研究とは?(窪田悠介)」「12 日本語学史(山東功)」の12章構成。末尾に「用例出典」「参考文献」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2019年2月1日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 352頁 1,800円+税 ISBN 978-4-89476-946-5)